

特集 自然体験キャンプを支える人たち

いよいよ短期山村留学「夏休み自然体験キャンプ」がスタートしました。こうした活動を支えてくれるのは、高校生から社会人までのボランティアのみなさん。子どもたちと共に活動するリーダー、各施設で食事作りや清掃などのサポートしてくれるスタッフと役割は二つあり、今夏も延べ80名近くのみなさんが活動の成功に向けて協力してくれそうです。

実はこうしたボランティアには「元々参加者だった」という人も少なくありません。子どもの頃の楽しかった思い出を胸に、そして出会ったリーダーに憧れて……という理由が多いようです。また、地域の専門家のみなさんも、活動に深みを持たせ、より本物の体験をということで協力してくれています。

今号ではそんなみなさんの声をお届けしたいと思います。

●出典：「育てる」通巻603号 平成30（2018）年10月25日発行

子どもから学ぶ

酒川 花夏

今回、私は以前からお世話になっている「育てる会」という団体のボランティアに行きました。育てる会は、

自然・生活体験活動を通して、教育活動を核とした都市と農山漁村の交流活動を全国に展開している団体です。私も、たくさんの活動に参加させていただいています。いつもの生活とは違った、自然の中でキャンプをしたり、山に登ったり、川遊びをしたり、セーリングをしたり、スキーをしたり、というように自然の中で小学生から高校生までみんな一緒に活動します。



今回参加した活動では高校生は参加者ではなく、スタッフとして、厨房で調理の手伝いや、運営の補佐として、子どもたちと一緒に活動する、ボランティアのリーダーと呼ばれる大人の方々と一緒に活動しました。そして、何より魅力的なのは、活動期間が長いことや宿泊場所がホテルや旅館ではなく、団体が所有するセンターであることにあります。私は東京を離れ、長野で活動してきました。参加した活動は、11泊12日という様々な活動の中でも特に長い活動です。主な私の仕事は、厨房で参加者の子どもたちのご飯を作ること、掃除、子どもたちと全力で遊ぶことです。

私の一日の大まかなスケジュールを表にまとめました。そして、今回は食育の指導も担当しました。三角食べや、肘をつかないこと、箸の持ち方、箸のマナー、自分がすでに知っていることでも、子どもたちは知らなかった

り、知っていても出来ていなかったり、自分で間違っていることに気付いていなかったり、様々な子がいました。

1日のスケジュール		
7:00	起床	タオル交換・お風呂マット洗濯・朝食準備
7:15	配膳	子供たちと配膳・箸置き準備・お皿の位置確認
7:30	朝食	子供たちと一緒にご飯！
9:00	活動始め	9:00までに厨房片付け・掃除・その後昼食準備
12:00	昼食	お弁当配り・活動終了まで掃除・休憩・おやつ準備
15:30	活動終了	「おかえり！」時間があればおやつタイム！
16:00	夕食準備	配膳準備・配膳図描き・子供たちお風呂
18:15	配膳	子供たちと配膳・箸置き準備・お皿の位置確認
18:30	夕食	子供たちと一緒にご飯！
19:15	掃除	子供たち掃除・スタッフは厨房掃除
20:00	ミーティング	子供たちミーティング・入浴！！
21:00	消灯	子供たち消灯・打ち合わせ準備・休憩！！
22:00	打ち合わせ	子供たちの様子・日記の返事書き・明日の流れの確認

参加者ではなく運営の裏方として活動するのは、今回が初めてでした。夜のミーティングで、参加者の子どもたちの様子や人間関係、注意しなければいけない点について話す中で感じたことがあります。それは、大人がどう行動するのか促すのではなく、参加者の子どもたち一人ひとりが主体的に動けるようにアプローチすることが、運営する側の心構えだということです。

参加者を経験している私は、自分がどれだけ快適に過ごせていたのかを、昔の自分に教えてあげたいな、と思いました。そして、子どもたちに指導するときに、出ていないことをそのまま注意するのではなく、出てくる子をはめて、できていない子に自分で気づかせる、ということ。子どもの気になる行動をすぐに注意するのはなく、必ず理由を聞いて、むやみやたらに怒らない、ということなど、「教育」という面で人との接し方や、子どもとの関わり方において、様々な学びがあったな、と思います。まだまだ、私も高校生という子どもの立場でしかないけれども、親御さんから大切な子どもを預かり、その子たちにアドバイスをするという責任ある運営側の人間なのだと思います。子どもたちが真似したくなるような高校生を目標に行動しました。

子どもたちは、私によく話しかけてたくさん遊んでく

れました。親しみを込めてあだ名をつけてくれたり、おんぶして！と甘えてくれる子もいたりしました。私は、様々な子どもたちとたくさん遊びながら、活動をサポートすることができて、本当に充実したボランティア生活を送ることができたと思います。

私がスタッフとして子どもたちとかかわる中で「移動キャンプ」というテーマの活動日に、大きな発見がありました。子どもたちは、班ごとに自分たちで窯を組み立てて、新聞紙や、乾燥した葉っぱや、小枝を探して、マッチを使って火をおこします。その火を使っ

て飯盒で、その日の夕食のビーフシチューをかける白いご飯を自分たちで作ります。

私はキャンプ場に行き、子どもたちの様子を見ながら、ビーフシチューをよそってあげました。この日まで、活動やメンバーにあまり馴染め



ていなかった子も、班の仲間たちと一緒に一生懸命自分の息を吹きかけて、ご飯を炊くために頑張っていました。そして、仲間と一緒に、ご飯ができた！と喜んで、私のもとに来たときは、「達成感」という言葉の意味を体験として子どもたちが学ばせてもらったな、と思いました。

また、移動キャンプの中の湖での遊泳では気温が少し低かったこともあり、途中で寒すぎてリタイアする子もいました。寒くて、泣きながら着替える子や水の中の水が温かいと潜る子、寒くて震えながらもまだ遊ぼうとする子など、様々な子がいました。活動に関わっていない人から見れば、寒くて泣いている子を見れば「かわいそう」と、思うかもしれません。しかし、責任者の方は子どもたちに「湖からあがりなさい」と声をかけることはありませんでした。普段の生活ではできない体験を子どもたちがしている、と考えたからです。この判断こそが、子どもたちの主体性を見出す一つの鍵なのではないか、と納得しました。子どもたちは決められた範囲の中で、それぞれ自分の考えるままに行動していて、誰一人、文句を言わずに思いっきり楽しんでいて笑顔だったことが特徴的でした。

木崎湖から帰る途中で、子どもたちとリーダーさんとみんなでガリガリ君を食べたときのみんなの笑顔は、今で

も忘れられません。

長い期間自然の中で活動して、様々な子どもと関わるうえでたくさんの方見がありました。一番感じたことは、出会いは本当に「一期一会」だということです。たくさんの参加者の子どもたちも、リーダーさんも、このメンバーで活動できる日は、その期間内しかないということです。他の活動で、また同じ参加者の子に出会える子もいるけれど、最初で最後の出会いとなる子もいるかもしれないということ。



たくさんさんの活動に参加する中で、何度も解散を経験してきているけれど、今までとは違う立場で、運営側として、参加者の子どもたちと濃い時間を過ごしてきたからこそ今までで一番、解散したくない、と思った活動でした。

今回、学校の夏ボラという課題を通して、ボランティアという言葉の深さを知りました。ゴミ拾い、清掃活動、一般的にボランティアとして知られている活動も多くある中で、子どもたちと活動し、自分も成長できる、という活動に巡り合い、「人に尽くす」ということを学びました。自分が、周りのたくさんの人に恵まれ、自分も楽しめる活動に参加できたことに感謝したいです。これからも、参加者としても運営側としても活動を思いっきり楽しみ、人に尽くしたいと思います。

●出典：「育てる」通巻444号 平成17（2005）年7月25日発行

一生の宝物の時間

西川 治（大学2年生）

今年も夏がやって来しました。毎年、夏の活動を紹介する『育てる』が到着するたび、私はいよいよ夏が来ると実感します。

私は小学4年から（まさか参加したいとは言うまいという家族の期待？を裏切って）毎年のように育てる会の活動（主に売木の活動でした）に参加し、そのままの

流れで高校1年でサブリーダー・スタッフとして、また大学入学後もスタッフ・リーダーで参加させていたたいしています。

何回参加しても、そのたびごとに特徴的な多くの出会いと、多くの思い出があります。育てる会で得たものは、私の人間としての非常に重要な部分を占めていると思います。

夏休みの活動などに参加するリーダーたちのグループの名前は「WALK」です。私は最初にそれを知ったときは本当にふさわしい名前だなあ、と思ったのですが、これは私自身、「歩く」ということが育てる会での思い出の中でも特に強く残っているからです。

小4のとき、村内オリエンテーリングで道を間違えて果てしなく思われる道を共に歩いたこと。中学生になって、それとは比べ物にならない、まるまる村2つ分の道のりを、一度は道を間違え、そして翌年にはしつかりと自分たちの意志で歩き通したこと。まだ小学生のとき永遠に続くとも思われた道は、中学生になればはやゴールへの最後の一息にすぎませんでした。さらに、足を痛めた親友と肩を組んで夜の道を歩ききったこと。延々と続く道を（起伏はありますが、一応舗装されています）一步一步しつかり歩いていく、ただそれだけのことで



あるのですが、数ある経験の中で、「歩く」ということは、共に歩いた友だちとともに、特に印象深いこととして心に残っています。

中学3年のとき、あるリーダーが受験勉強と歩くことは一緒だ、ということの説明されました。歩くことは、あと一步踏み出しても大丈夫だろう、またあと一步踏み出しても倒れないだろう、というのを積み重ねていつてたどり着くもの。受験勉強も、まだできる、まだできる、と少しずつ伸ばしていけばいいのだ、ということです。この「歩く」ということから、私は物事を一步一步、着実に踏み固めながら解決していくことを心がけるようにしています。「歩く」

こと一つをとっても、育てる会の中での経験は、私にとって非常に大きい影響を与えているのです。

都合で高校2・3年の間は参加できず、その間にはいろいろありましたが、大学1年の夏にスタッフで参加す

ると、私が最後に来てからかなり経っていたにも関わらず、そこには以前のように、元気な子どもたちとのたくさんのお会いと、とても充実した日々がありました。私たちが厨房でご飯を作っていると、朝には外へ飛び出していく子どもが、昼には外から帰って来た子どもが、次々と声を掛けてくれます。一緒にご飯を食べ、暇を見れば一緒に遊び、村も巡りました。

わずか10日程度の日はあつという間に過ぎ去っていましたが、子どもたちは一日一日を思いやり楽しみ、そして自分で感じている、いないはありますが、とてもたくさんのものを得ていたと思います。私自身も、この夏が忘れかけていたものを思い出させた、そのような感じがします。

私は大学2年生ですが、今は教養課程の講義に加え、教職科目をいくつか学んでいます。また、来年から教育学部に進学したいと思っており、教育に関して本を読んだり、仲間同士で議論したりする中で、これまで「自分が体験してきた育てる会の活動の良さ」が、今の教育そのものに求められている、本当の「人間のための」教育の良さだったと感じています。

『育てる』誌にはこうあります。「育てる」とは子どもが 自分の もって生まれた個性に 目ざめ 自信

●出典…「育てる」通巻519号 平成23(2011)年10月25日発行

感性を育む里山の自然観察

倉科 和夫(元大町山岳博物館館長、
育てる会講師)

「この木なんの木？」で始まる自然観察

八坂村のセンター「やまなみ山荘」入り口には、樹齢八十年を超す数本の大木がある。夏冬季に行われる短期の子どもたちとの自然観察の出発点はここと決めている。

「ここに大きな木が何本かあるね。みんな同じ木なのか？」と問いかける。ここから子どもたちとの対話が始まる。

「同じじゃない。三種類あるよ」

「どこを見てわかったの」

「あの木の幹は赤いが、こっちは茶色で皮が薄く縦に長くはがれる」

「まっすぐ伸びている木と幹がくねくね曲がっている木がある」

「枝が大きく横に広がっている木と形が整った木がある」
「同じところはないのかな。葉っぱを手にとって見てらん」

を持ち、それを喜々として、自分の力で、育てていくことである。「育てる」とは、たいていは、大人「が」子ども「を」「育てる」というように思われている言葉ではないでしょうか。それを、子ども「が」子ども自身の個性「を」「育てる」というように考えるのです。では大人は何をするかと言えば、「リーダーは後ろに立て」ということになるのです。これほど大胆な、鋭い見方はなかなかできるものではないでしょう。

教育ということについて真剣に考えるようになってから、私はこの精神に感嘆するとともに、納得しました。これだけの考えをしつかりもっているからこそ、育てる会の活動でこれだけいい経験をさせてもらえたのだと。

本来にあらゆる面で個性的な子どもたちと過ごす時間、これはかつて小学生・中学生で参加したときそうであつたように、子どもにとつて一生の宝物ですし、私にとつても一生の宝物です。今年の夏は、私にとつて、やはり印象深い夏の活動で初めて活動リーダーに挑戦する、大事な夏です。育てる会の精神をしつかり大事にして、子どもたちと接し、子どもたちと一緒に、充実した日々を送りたい。私はもう、早く夏が来ないかと楽しみでなりません。いい一夏を送りましょう。



センター入り口の林
水神様の祠^{ほこら}を囲むマツ、スギ、
ヒノキの老木

と共通点に目を向けさせる。

「葉っぱが針のように尖^{とが}っているところは似ている」
等々答えが返ってくる。ある子は、太い幹の樹皮を指差して、「深い割れ目の形が亀の甲羅のようだ」と。木の下の落ち葉を手にした子は「細い葉っぱは枯れても二枚くっついているよ」、他の子どもたちも落ち葉を手にして「本当だ、みんなくっついていてるよ。本当に仲良しだね」と目を輝かせる。

色々なうれしい答えが返ってくる。小学校の三、四年生が持っている素晴らしい感性が呼び覚まされた瞬間でもある。

こちらがスギで、あちらがアカマツであることが子どもたちの脳裏に深く刻まれたようである。

冬の観察会の折には、横に伸びる枝先に扇状に広げた小枝の上に雪が降り積もり、その重みで枝が今にも折れそうな様子が見える。

「マツさんが今、みんなに何と言っているかね」

と問いかけると、すかさず、「重いよう、雪をどかしてくれ」と。

「そうだね、マツさんは重い雪を背負って、じつと我慢しているんだね。早く春になっておくれ、暖かくなるのをじつと待っているからマツと言うのだね」

「松という字の公^{つみぎ}は、葉が針のように細いから間が透けているということを表しているのだね」

「枝をかざしてみてごらん」

「隣にある木は幹が真っ直ぐに上に伸びる直木^{すくき}だからスギと言われる」

「杉という漢字にも松と同じような意味があるの？」

「杉という字の杉^{さへび}は細かい針のような葉がたくさん並んでいる木という意味なんだね」

みんなでスギの葉がきれいに並んでいることを確かめてみる。

「マツとスギではどちらが長生きですか」と今度は樹齢について質問する子がいる。

「このマツの木は、環境が変わらなければ、ここで

五百年以上生き続けられるだろうね」と話を続ける。

「スギは三千年以上生きる、日本一長寿の木だよ。さらに背高のつばきさんで、60mにもなり日本一大きくなる木なのだよ」

「花粉症の原因を作っている木はこれなんだ」と枝を取って観ている子がいる。

マツやスギという名前を知っていても、直接手にとつて針葉樹の葉のチクチクする感触を確かめたのは、おそらく初めてであろう。

ヒノキは摩擦して火を起こすから火の木、「カラマツ」は松の種類では珍しく落葉するから「落葉松」と言う。日本特産種であるが、落葉する松は珍しいので「唐の国から来たのだろう」ということで、「唐松」となったと言われている等、葉に触れさせながら会話がはずむ。「比べてみたら、分かった」という直接体験を通して自ら発見の楽しさを味わうところが自然観察の醍醐味なのである。

豊かな匂いに満ちた自然観察

センターを出てすぐに目に付くのは、片側の急な山肌から、道端にまで無数に垂れ下がる葛である。大きな葉の脇から紫紅色の穂状の小花が咲き始めている。「大き

く息を吸ってごらん」「よい香りがするよ」「花が甘い芳香をあたりに撒き散らしているのだね」「これからも、色々な『におい』のする草木に出会うから楽しみにして歩こうね。」

スギ林の道筋には、和菓子^{わかし}の楊枝^{ようじ}に使われるクロモジの高貴な香り、明るいコナラ林治いにあつたゴマギは胡麻^{ごま}そつくりの匂い、そしておなじみのサンショウは特有の山の香りがする。別名を百里香^{ひゃくりやう}と言ひ、香りが百里の遠くまで届くという意味を持っているイブキジャコウソウ、学名にまで悪臭と名付けられたヘクソカズラ等「におい」植物との出会いがあつた。自然観察では臭覚を働かせることがとても大切なことを実感したようだ。

木を知って、森を見る自然観察

山道を歩いていくと、出発点で覚えた木が次々と現れる。ここはスギ林、今度はカラマツ林、アカマツ林、ヒノキ林とすっかり自信を持つて言えるようになった。途中で、手入れされていないスギ林では同じ時期に植樹したのに、上に勢いよく生長している横に弱々しく立っている木があり、生存競争の厳しさが植物社会にもあることがわかったようである。

広葉樹の林ではコナラの上を覆い尽くすまでに繁茂す



森ではそれを構成する植物同士が互いに影響を与えながら、個性的な生活をくりひろげているのである。

遊び心いっぱい自然観察

鷹狩山からの下り道で「みんなの足元に生えている草に名前を付けてほしい」と投げかける。子どもたちは私が指差した植物を手にして「自分だったら……」と考え込む。みんなこの植物を観察してその特徴を見つけようと懸命だ。

頃合いを見て「この植物が喜びそうな名前を付けられませんか。発表してみて」

「ケブカグサと付けました。そのわけは茎に白い毛がいっぱい生えているから」「私は葉っぱに皺しわがあり、形

るクズの生長のすさまじさも目の前にした。ヒノキやスギにも絡まりついているのを目にすると、あの甘いよい香りとは裏腹に有害植物でもあることを知った。

がササに似ているからサザナミザサと付けました」「僕は葉の表面の凸凹が織物のようだからハタオリグサと付けてみました。」そのほか「ササモドキ」とか「ケザサ」等の名前が出てきた。「本当の名前は？」と聞かれた。「チヂミザサと言うが、君たちの名前の方がいいね」と褒めてやった。子どもたちの持つ確かな観察力、目の付け所、そして豊かな感性のひらめきに感動した。

子どもたちが五感をフルに働かせて自然の奥深さに触れた時「わあ、すごい！ 不思議だ」と「真に分かった」と言う。自らの直接体験を通してのみ可能だということであると思う。

この拙文を書きながら、忘れられない言葉を反芻はんすうしている。若い頃、訪れたボストン子ども博物館のスローガンの一文である。

I hear and I forget. 聞きっぱなしだと、忘れちゃう。

I see and I remember. 見たことは、覚えていいる。

I do and I understand. やってみたら、初めてよく分かった。